

目 次

第 1 章	政治学における計量分析の役割	1
1.1	リサーチクエスション	1
1.2	理論と仮説	2
1.3	仮説の検証	2
1.4	計量分析の限界	3
1.5	政策科学との関連	3
1.6	面白い研究とは	4
第 2 章	統計的推測の考え方：内閣に対する国民の支持	5
2.1	日本の有権者の内閣支持態度	5
2.2	統計的推測とは何か	9
2.2.1	平均値の t 検定	11
2.2.2	二つの平均値の差の t 検定	14
2.3	割合に関する推定	17
2.4	R ソースコードと出力の記録	20
2.5	決定的選挙の検証：Burnham (1970)	21
2.5.1	アグリゲートデータにおける統計的推測	24
第 3 章	回帰分析 1：政府のパフォーマンスと社会関係資本	27
3.1	相関係数	27
3.2	単回帰分析	32
3.2.1	最小二乗推定量の導出	32
3.2.2	回帰分析における仮説検定	36
3.2.3	決定係数と相関係数	37
3.3	ダミー変数，統計的統制	38
第 4 章	回帰分析 2：アメリカ大統領選挙の予測	43
4.1	2008 年アメリカ大統領選挙の予測	43

4.2	交差項	46
4.3	最小二乗法の前提条件	52
4.3.1	ガウス・マルコフの定理	52
第 5 章	パネルデータ分析：国家間の比較政治分析	61
5.1	誤差項の分散不均一性と自己相関の問題	66
5.2	パネル修正標準誤差+ラグ付従属変数	70
5.2.1	政府のイデオロギーと労働組合の強さが経済成長に与える影響	70
5.2.2	このアプローチへの批判	74
5.2.3	固定効果+クラスター化標準誤差	74
第 6 章	ロジット：政治運動への参加	79
6.1	なぜ最小二乗法が使えないか	79
6.2	ロジット	80
6.3	最尤推定法の考え方	83
6.4	反政府運動への参加	85
6.4.1	推定後の解釈	88
6.5	for によるループ	93
6.6	最尤推定量の特徴	94
第 7 章	順序ロジット：第三国による国家間武力紛争への介入	95
7.1	武力紛争に対する第三者の直接的介入の要因	96
7.1.1	推定後の解釈	98
7.2	for によるループ	102
第 8 章	多項プロビット/ロジット：3 人の候補者の選挙における投票選択	105
8.1	1992 年アメリカ大統領選挙における有権者の候補者選択	105
8.1.1	多項プロビット	108
8.2	無関係な選択肢からの独立性の問題	110
8.3	多項ロジットによる分析	111
8.4	推定後の解釈	112
第 9 章	イベントヒストリーモデル：有志連合からの離脱	117
9.1	有志連合からの脱退の原因	117
9.1.1	離散時間/連続時間ハザード率	120
9.1.2	コックスの比例ハザードモデル	122
第 10 章	マルチレベルロジットモデル：ヨーロッパの極右政党への投票	125
10.1	コンテキストの個人に対する影響	125
10.1.1	単純な線形マルチレベルモデル（ランダム切片モデル）	127
10.2	ランダム切片モデルの推定	128
10.3	ランダム効果の図示	130

10.3.1	単純な線形マルチレベルモデル（ランダム切片+ランダム係数モデル）	130
10.3.2	ランダム切片+ランダム係数モデルの推定	131
第 11 章	計量政治分析のこれから：「ゴミ缶回帰」を超えて	139
11.1	実験室における因果効果の検証	139
11.2	回帰分析における統制変数の使用の問題点	140
11.3	学ぶべき教訓と新たな方向性	141
参考文献		143
索 引		146